

茨城論壇

今県内在住のがん患者・家族等が、学校教育におけるがん教育で自分たちが何ができるかを真剣に考え学び始めた。昨年11月から今年1月にかけて3回、延べ15時間にわたってNPO法人県がん地域医療を考える会主催の「がん教育を学ぶ」と題した勉強会が開催された。

受講者は県内のがん患者体験者とその家族に加え、医療者、行政、教育関係者等、約50人。講師陣も県や県教委、県内で禁煙推進の普及啓発活動に取り組む県立中央病院の天貝賢二医師、国立がん研究センター・がん対策情報センターで、がん統計に携わっている片野田耕太医

元近畿大学理工学部講師

佐藤 好威

茨城新聞 150207

がん教育に体験談有効

師と多彩な顔ぶれであった。1日目は、県担当者が第2次

に対しては健康と命の大切さについて学び、自らの健康を適切に管理し、がんに対する正しい知識とがん患者に対する正しい認識を持つよう教育する」と明示されていると説明した。また、

防にたいする理解の深化を図る」と補足した。2日目は「禁煙授業の経験」と題し、中・高校生を対象にした授業(講演)の実際例を天貝医師が紹介。授業後のニコチン依存度のアンケート調査結果で

についての正しい認識が不足しているという懸念から始めたという。教材は「がんについての正しい情報を生活者に伝える」ことを共有理念とし、伝えるメッセージは以下の3項目に絞った。がん患者の現状から①二人が一生のうちになんかがんになること。小学5・6年生の学習指導要領にある「病気の予防」に準拠する内容として、②多くのがんは生活習慣で予防できること、対象児童の親の年齢が、罹患リスクの高まる40歳前後に相当し、子どもを介して大人世代に検診を普及したいという意図から③早期発見と適切治療で普段の生活に戻る。

教材になりうるものと私は感じた。しかし、教材に順じた教育実践例から、専門家の「教育」としての授業のみでは本場のことが伝わらない不足感を抱いた。片野田氏は、そこにがん体験者の話を加えた。その結果、子どもたちの目の色が一変するのを見て、体験談の重みを痛感したと述べた。そこで第四のメッセージとして「病気になるっても自分らしい、新たな人生が送れることを知ってほしい」という項を加えたことである。

する理解を深める教育は不十分である」と現状認識を示し、教育の方向性として「特に子ども

は「喫煙を美化したり、合理化したり、書を否定する意識」が授業前に比し著明に低下する」とが示され、普及啓発(授業)活動の有用性を説いた。

3日目は「がん教育」といってこれまで「がんに関する具体的な知識を子どもに身に付け、疾病予

かくして完成した冊子が「がんのことをもっと知ろう」である。イラスト入りの平易な文章でまとめられ、一読して十分に

「病気にめげずに生きる」姿は人の普通の生きざまだ。こんなことを子どもたちに伝えられたらと強く思う。